

# 山口四二連隊のシベリア出動、一九一九年八月

井 竿 富 雄  
Tomio IZAO

はじめに

- 一 シベリア出兵の方向転換
  - 二 第一次世界大戦の終結と山口町
  - 三 四二連隊の出発
- 小括

## はじめに

シベリア出兵は長期にわたる戦争であった。一九一八年に始まり、教科書的な認識では一九二二年に終結したことになっている。だが、一九二〇年の尼港事件に始まる「薩哈噠(サガレン)州派遣軍」が最終的に撤退するのは一九二五年のことである。<sup>1)</sup>

この出兵では、各地の師団が一年ほどのサイクルで交替しながら現地に派遣された。第五師団歩兵四二連隊も、この出兵を経験した部隊の一つである。この部隊は山口県吉敷郡山口町及び宮野村の境界線附近にあった。現在も陸上自衛隊の駐屯地がある地区である。この論文では、この四二連隊のシベリア出兵への発動への光景を描き出すことを通じて、シベリア出兵が長期化しはじめた時期の地域・兵士などの動きを明らかにしたいと考えている。

この四二連隊のシベリア出兵に関する文献としては、当事者四二連隊の戦友会が編纂した連隊史がある。<sup>2)</sup>この連隊史には、当時はまだ話を聞くことのできた生存者の手記も収録されていて貴重である。ただし、この連隊の経験した他の戦争に比べて、著しくシベリア出兵に対する記述は少ない。また、当事者の証言のみが記されているため、四二連隊が派遣されることが決まったときの内外情勢とのかかわりが有機的にとらえられない。無論、これは連隊史というものの性格を考えれば、要求すべきものではないかもしれない。ただ、シベリア出兵をより深く考察するためには、一つ一つの部隊の戦争経験を、より大きな内外の状況の中に位置づけていく必要がある。前述したように、シベリア出兵は長期にわたる戦争であり、全国各地の部隊に所属する多くの将兵がこの戦争に参加した。それぞれの体験が総体としてシベリア出兵を形作っているのである。本論文の作業は、その一部ということになる。

そこで本論文では、まずこの時期のシベリア出兵を取り巻く内外情勢を記す。この部分の記述は、先行研究などを中心として組み立てられている。概説的に見えるかもしれないが、この大状況のもとに、一地方の部隊が出動させられていく背景を見ておかなければ、ある部隊なり個人なりが戦場へ派兵させられていく構造が読み取れないからで

ある。次に、シベリア出兵前夜の、連隊にかかわった吉敷郡山口町の状況を明らかにする。四二連隊が派遣される一九一九年は、まさに第一次世界大戦が終結した年であった。しかもヴェルサイユ条約締結一カ月後の出兵だったのである。シベリア出兵は、ヨーロッパ戦線へ向かうチェコ軍を救援するのが第一義的な大義であった。第一次世界大戦が終わったということは、この前提が揺らぐことを意味していた。具体的に四二連隊が発動されたときの光景は、その後に記されることになる。

## 一 シベリア出兵の方向転換

山口の連隊がシベリア出兵へ向かったのは、一九一九年八月のことであった。この時期は既に、シベリア出兵が当初の大義を喪失しつつある時期であった。この時期に山口連隊がシベリア出兵へ出動させられることは、いかなる意味づけや位置づけを持っていたのかをまず本節で明らかにしておく必要がある。いささか煩瑣ではあるが、先行研究によりつつ、山口連隊の出動にかかる大状況を概観しなければならぬ。このことよって、四二連隊のシベリア出兵が置かれていた位置や、後に述べる周囲の人々の反応の理由が分かるからである。

一九一八年八月、シベリア出兵は開始された。日米共同で、「チェコ軍救援」という旗印の下になされたものであった。ロシアに宣戦布告はなされず、ただ、出兵に関する宣言が両国政府によりなされた。ロシア国内において、オーストリア・ハンガリー帝国からの分離独立を目指すチェコスロヴァキア軍団のヨーロッパ戦線への移動を助けるのが大義名分とされていた。日本軍やアメリカ軍が戦うのは、それを妨害する敵国勢力や、彼らに協力するロシアの一部勢力ということになっていた。しかしながらチェコ軍は既にこの当時ロシアの反革命派と意

を通じていたため、自動的にシベリア出兵はロシアの革命政権との戦争にならざるを得なかった。<sup>3)</sup>

その後、日本国内においては、出兵を発動した寺内内閣が総辞職した。後を襲った原内閣は、陸軍大臣に出兵を軍人として推進してきた元参謀次長田中義一を据えた。外相には、一〇月革命を目撃し、出兵には批判的であった外交官内田康哉が就任した。とはいえ、一度発動された軍事は容易に撤退できるものではなかった。ヨーロッパ諸国は常に、日本軍がより広範囲にわたって陸軍兵力を派兵してくれることを望んでいたからである。また日本国内でも、陸軍内部には「東欧新戦線形成」などの理由をもって大量派兵を實行しようと考えているものがいた。派兵範囲の拡大と、兵力数の増加に関しては、原内閣はなんとか抑制することができた。一九一八年一〇月一五日、原内閣は、「何等今ヨリ予見シ難キ事態ノ発出セザル限り目下貝加爾湖以東ノ地区ニ策動中ナル帝国軍隊ヲ其ノ以西ニ進出セシメザルコト」<sup>4)</sup>を閣議決定した。だが、シベリアからの全面撤退をいうことはできなかった。そうして一九一八年の年末には、第一次世界大戦は、ドイツ帝国の革命による崩壊という劇的な形で終焉を迎えたのである。ドイツを中心とした勢力は敗戦により解体された。チェコ軍は、独立達成によりロシアに留まって反革命派に協力する必要も、西部戦線に行く必要もなくなった。このことにより、シベリア出兵が掲げていた「チェコ軍救援」の大義は徐々に失われていくことになった。シベリア出兵は、公的にも実質的にも大きく変わらざるを得なくなった。シベリア出兵は、明確に「反革命派支援」のための軍事力発動になったのである。

ロシアの情勢は激変を繰り返した。よく知られているように、日本はセミヨノフ、ホルヴァートなどのロシア反革命派を擁立し、出兵前から秘密裏に援助を与えていた。しかしながら、反革命派の中で突出したのは、イギリスにより擁立された海軍軍人コルチャークであつ

た。コルチャークは反革命派の連合体だった「全ロシア臨時政府」を武力で掌握し、急速に支配地域を拡大した。これが通称「オムスク政権」と呼ばれるものである。日本が支援した反革命派のグループは、シベリアの一部や満州を支配するに過ぎなかった。さらに、反革命派内部での対立も著しかった。日本を含む列強は、反革命派内部の対立を收拾し、そうしてコルチャーク政権を支援するという、「ボリシェヴィキ政権打倒」政策を明確にしなければならなかった。ところが一時はロシアの大半を支配下に置いた反革命派の「全ロシア臨時政府」は、一九一九年にはもろくも崩壊の兆しを見せ始めていた。<sup>5)</sup>

世界情勢の変動に対して、日本も適応しようとした。原内閣は、一九一九年一月、対ロシア政策方針を立てた。そこには「兵力ヲ以テスル援助ハ絶対的必要ノ生セサル限り現状以上ニ拡張セサルモノトス」という方針があった。この方針では、ロシアには統一政府を樹立させ、コサックが新政権の軍隊に編入されることが望ましいとも書かれていた。ロシアの新政権は「全然平和主義ヲ国是トスル」ものであるべきだとも記されていた。

だが、シベリアについては、「仮令他日露国中央政府カ極東方面ニ向テ侵略的政策ヲ執ラントスルカ如キコトアルモ西伯利ニ於テハ能ク之ヲ抑制スルコトヲ得セシムルノ方法」が採られるべきであると記されていた。つまり、ロシア反革命派政権にすらもシベリアは触れさせない、ということであった。ロシアがいくつかの政権に分裂してしまふことは望まないが、強大なロシアの復活は帝国主義国家としての日本には望ましくないことであった。それがこのような要求になったのである。<sup>6)</sup>「平和主義」のロシアとは、他の帝国主義国に刃向かわないロシアのことであった。

日本をはじめとする連合国が対ロシア政策について模索を繰り返している間に、シベリア現地での戦闘は困難なものとなっていた。強

力な武器を持つ日本軍は、出兵宣言後またたく間にシベリア鉄道沿線を占領した。ところが抵抗するボリシェヴィキ軍は、正規の戦闘ではなく、ゲリラ戦を用いて日本軍を混乱させた。その結果、日本軍は住民とボリシェヴィキ軍との区別がつかなくなり、村落の破壊と無差別殺戮という事態に踏み込んでいくことになった。最初に派遣されたのは、第一二師団(小倉)、第三師団(名古屋)、第七師団(旭川、本来は満州に駐屯していた部隊)であった。

そして一九一九年二月、第一二師団傘下の一部隊が、ボリシェヴィキ軍を追撃中に逆に包囲され、壊滅的打撃を受けるといふ事件が起こった。それまでボリシェヴィキ軍はさほど強力な軍隊とは考えられていなかったため、この敗北は大きな打撃として受け止められていくことになる。これが有名な「ユフタの戦い」である。<sup>7)</sup>

このような結果、日本軍がやっていたアムール州でのボリシェヴィキ軍に対する「討伐」作戦についても、犠牲者ばかりが出てあまり作戦の効果が上がらない、「軍隊ノ努力ハ却テ帝国ノ為不利益ノ結果ヲ齎スノ疑ナキ能ハサルモノアリトノ議論」が出るに到った。東京でも、田中義一陸軍大臣が、第一二師団を他の師団と交替する提案を行っていた。それは、「此際敵愾心旺盛ナル第十二師団ヲ交代セシムルハ対露政策上良好ノ結果ヲ生スヘキ」という理由からであった。シベリア出兵に従事していた日本軍が、もはや誰が敵で誰が味方がわからないう状態に置かれていたことを東京で認識していたことがよく分かる。<sup>8)</sup>

その結果、第一二師団の交替として、第一四師団(宇都宮)がシベリアに派兵されることになったのだが、この派遣自体が難澁を極めた。派遣軍側は、兵力減によって「討伐」作戦が困難になることを考え、この措置自体を遅らせようと試みるほどであった。<sup>9)</sup>第一四師団の到着が完了したあとで第一二師団が撤退することになったのだが、一九一九年六月以降、ボリシェヴィキ軍は沿海州で活動を活性化させた。さら

に、ポリシェヴィキ軍による鉄道破壊により、第一二師団の撤兵自体が遅れることになった。このような状況下、浦潮派遣軍司令官からは増兵要求が頻繁に来た。この時期、一二師団と同時期に出兵した、第三師団も交替することになっていった。こうして、第五師団(広島)に対する派遣命令が発せられることになったのである(一部は先遣隊として既に派兵されていた)。第五師団に対する正式な派遣命令は、一九一九年七月二六日のことであった。<sup>10)</sup> こうして、第五師団傘下の第四二連隊がシベリアへ向かうことが決まったのである。

## 二 第一次世界大戦の終結と山口町

前節での背景を受けて、ここでは、第五師団四二連隊の出兵前夜における、県都吉敷郡山口町(県庁があったが、市ではなかった)の様子を明らかにしていきたい。ここで使われているのは、ほとんどが新聞史料である(山口市は現在、市史の編纂作業中である。この市史が作られることによって、事態は大きく改善されるであろうと期待する)。当時山口町においては『防長新聞』という日刊紙が発行されていた。この紙面に載った記事から割り出すことにしたい。新聞史料が当時の状況を正確に叙述しているわけではない。新聞には党派性があり、編集方針もあったからである。<sup>11)</sup> ただ、大きなイベントなどの開催は知ることができる。また、とりあえず最低限の事実を探り出すことは可能であると考えられるからである。また、公的なイベントでの、当時の県・町の当局者の発言や、インタビュウに答えての軍事関係者の発言が、紙面には掲載されている。このような公的な場での発言を知るためには、新聞はそれなりに使える史料であると考ええる。

山口県自体は、既にシベリア出兵を経験していた。県西部地域の下関市、豊浦郡、厚狭郡は第一二師団の管区内に属したためである。特

に、厚狭郡宇部村は、出兵と同時に激しい米騒動を経験するという未曾有の事態に陥った。<sup>12)</sup> 今回シベリア出兵にかかわるのは、第五師団である。第五師団は、山口県の中・東部地域を管区としていた。このことで、県都山口町を含む地域がシベリア出兵に動員されることになった。歩兵四二連隊は、吉敷郡山口町と隣の宮野村の境を接する区域に存在した。山口町を中心として、現在の山口市に属する町村は、すべて今回の出兵に関与せざるを得なくなったのである。

シベリア出兵発動当時に大問題であった米価の高騰は、実はこの時点でも全く改善されていなかった。官製婦人団体である愛国婦人会は一九一九年六月、「軍人遺族廃兵は勿論其他応召又は現役中の家族にして、生計最も困難なるも軍事救護法により救護を受くる資格を有せざるもの」の調査を命じている。召集・出征は、一般家庭には働き手を奪われるという経済的な大打撃であったからである。ましてその働き手が戦死すれば、残された家族は社会的転落・生命維持の危険にさらされた。

一九一九年の山口町にとって、まず来たのは平和ムードであった。ヴェルサイユ条約の調印が終わり、法的にも第一次世界大戦が終結したからである。一九一九年七月一日、山口町は祝賀一色となった。予定されていた行事だけを見ても、祝賀行事は相当華やかなものであったことが分かる。官庁は郵便局(平和記念の切手四種類が発売された)を除いて臨時休業することになっていた。町は日の丸の旗で飾られた。この日午前七時から、講和条約調印祝賀式が行われることになっていた。また、山陽電気会社は自社本社前、県庁前ほか町内の二箇所(緑門や電飾を提供した。山口県庁も「本庁舎前に五百燭光二個教習所前(県庁近くに「巡查教習所」があった―井竿)前に百燭光一個教習所前)に五百燭光一個の電飾」を施した。四二連隊もこの日観兵式を行う予定だった。子供たちの旗行列や、夜間のちょうちん行列も行われる

予定となっていた。<sup>14</sup>これらの行事のうちのいくらかは実行できなかった。この日山口は雨が降ったためであった。

七月一日朝から町内大殿小学校(よく大きな祝賀行事の際に用いられたようである)で行われた講和条約調印祝賀会では、柏村唯雄吉敷郡長、中川望山口県知事が演説した。特に中川県知事は、注目すべきことを言っている。中川知事は、第一次世界大戦の経過を説明したあと、ヴェルサイユ講和条約の締結をこのように評価していたのである。

「講和は―井竿―真に是れ世界改造の序幕にして人類の惨禍はれに由りて免るべく慶福亦是に由りて生ぜむ則ち世界の文化に一新紀元を画せるものといふべし而かも前途之が改造の実を達成せむには五大強国の任や益々重く特に我帝国の使命は弥々大なり」

講和条約が締結されたことは、このように公的な立場にあっても「世界の改造」であった。しかも、このことは、日本が「五大強国」になったことと全く矛盾するものではなかった。それどころか、改造された世界で日本が重要な役割を果たすものとなることが期待されているのであった。

この日は、周辺の村でも祝賀会が催された。たとえば、山口町の隣である吉敷郡宮野村では、「午前七時三十分小学校に於て祝賀式を挙げ午後五時より公会堂に於て祝賀会七時より字龍王より仁壁神社迄提灯行列」などと報道されている。ただし、厚狭郡宇部村のように、現在兵士が出征中のところでは、出征軍人が帰還するのを待つて祝賀をする予定にしているところもあった。<sup>15</sup>

山口町の祝賀会では、「平和来」という歌が歌われた。作者は山口県立教育博物館長作間久吉(鴻東の号を使っていた)である。歌詞は以下のようなものであった。<sup>16</sup>メロデーは休戦祝賀会のものが再利用さ

れた。日本は連合国の一員として参戦していた。ヨーロッパ諸国のように自国の国土が戦場になったりはしていなかったが、陸軍は青島での戦争に参加していた。また、海軍は地中海をはじめとする海域に艦隊派遣をしていた。以前の日露戦争ほどではないにせよ、戦争に関与してはいたのである。その意味では、この歌詞はさほど大げさではないかもしれない。

全国一斉天地も

揺ぐばかりに歓喜(よろこび)の

諸声合せて迎へなん

世界の平和は来りたり

與国はもとより独塊も

戈を枕の夢醒めて

光風霽月敵味方

世界の平和は来りたり

五年このかた鎖しつる

乾坤今や雲晴れて

一しほ輝く日の光り

世界の平和は来りたり

手の舞足の踏むところ

知らざるまでにいざ祝へ

しかも兜の緒を締めて

世界の平和は来りたり

悪天候で延期されていた提灯行列は、七月七日夜に行われた。ここでも、講和条約の意味は非常に大きく考えられていたことが分かる記述に出会う。吉敷郡役所は「世界改造と記せる地球儀」をかたどった提灯を出品していた。第一次世界大戦後の世界秩序は、当時の日本にとって、公式的にも「世界改造」として説かれるべきものだったのである。

行列に参加したものの中には、全部赤い洋服で固めた八木呉服店（現在のちまきや）の人物や、「山口高等学校受験団」などという集団まであったという。彼らは山口県庁の出迎えを受け、八坂神社を通って歩兵四二連隊へ向かった（現在もある道路であると考えられる）。ここで万歳を三唱した参加者は、今度は大殿、下堅小路、大市町、中市町、米屋町などという、現在でも山口市の中心街とされている地域を通り抜け、山口高等商業学校の運動場で万歳を叫んだ。山口町の町民祝賀団は、さらに湯田温泉まで歩いていった。この祝賀行列を見物する人の様子も、「其の際の大市中市通りは往くさ来るさの人々に肩背相摩し火の海人の波歎呼の声勇しく盛況壯観誠に美事な眺め」であったと書かれている<sup>17)</sup>。

このように、県都山口町では、第一次世界大戦の終結を祝う雰囲気<sup>18)</sup>が盛り上がった。それは、「平和」が遂に来たということでもあったであろう。ヨーロッパほどに切実なものではなかったかもしれないが、平和と戦勝が同時に来たというのは住民の心理に大きな影響があったと考えられる。とにかく、戦争は「終わった」からである。

しかし、この祝賀会からわずかに一ヶ月ほどで、山口町は兵士を送り出すことになった。シベリア出兵の動員令が出たためである。この前後、山口町や周辺町村ではどのような動きがあったか。次の節ではこのことを明らかにしていきたい。

### 三 四二連隊の出発

本節では、四二連隊のシベリア出兵への動員への様子を明らかにしていきたい。ここで用いられる史料は、前節の『防長新聞』ほか、防衛庁防衛研究所に所蔵されている憲兵報告<sup>19)</sup>が主である。

山口の連隊にシベリア出兵の動員令が下るらしいという噂は、実は「本年（一九一九年のこと―井竿）初夏ノ頃」には既にあったと言われる。そのため、この年の秋に満期除隊を迎えられるはずだった兵士が、除隊は無理であろうと考えて「失望的ノ言」を吐いたと憲兵報告は記している<sup>19)</sup>。

六月頃になると、兵営の中では将兵がロシア語の学習を始めていた。兵士は『日露会話』という、必要最低限のロシア語を日露対訳で記した冊子を読んでいた。将校は山口高等商業学校の北島常晴教授からロシア語の手ほどきを受けていた<sup>20)</sup>。

しかし、本格的にシベリア出兵が意識され始めたのは、平和祝賀会のムードが収まった七月の後半からである。『防長新聞』には、まずシベリア派遣軍将校用の馬丁の募集記事が掲載された。この記事では、シベリア出兵は「過激派討伐の為」であると説明されていた<sup>21)</sup>。第一節で書いたように、正式に第五師団に派遣命令が出されるのは七月二六日のことである。このあたりから、急速に歩兵四二連隊を取り巻く空気はあわただしくなった。まず動いたのは郵便局と面会であった。新聞には、「出征の内命があったと見えて兵士等は郷里に手紙を出すワ出すワ管門前のポストは毎度口から溢れる程で郵便屋さんも驚いて居る」という記事が見られる。またこの記事では、兵士が出征直前に記念撮影をすること、そうして面会人が兵営に殺到していることを伝えている<sup>22)</sup>。また、出兵にむけて、兵士たちが郵便貯金を大量に引き出し始めた。七月三一日から八月九日までに、山口郵便局で計三一四五円

一〇銭の現金が下ろされている。<sup>(23)</sup>

出征直前は、軍人も地域社会もあつた。もちろん出動の準備もあつた。また、地域社会からの慰問があつた。各郡からは、同郷出身の兵士に対して慰問品が届けられた。例えば大津郡長中原武一は手帳を、都濃郡長草刈直一は下松神社のお守りを贈った。<sup>(24)</sup>熊毛郡長増淵宗一郎の贈った手帳は、前述の作間久吉教育博物館長の揮毫付きであつた。<sup>(25)</sup>兵士の家族が面会する際には、家族が大量の差し入れをすることがあつた。四二連隊の一大隊長は、兵士は防寒具を持つていかなければならないので、荷物が増えることは好ましくない、「出征兵の耐寒準備に就ては何等気遣ふ事なく十分士気を鼓舞して元氣能く出征する様に勉められたきものなり」と紙上で語つてゐる。<sup>(26)</sup>また、山口町内では千人針を集めている女性がいることも報じられてゐる。<sup>(27)</sup>

また、新聞紙面には、出征兵士の出発の際、各地域の見送り分担についての予定が書かれていた。これらの記事には、兵士が行軍の際どこで休息するか、また各自自治体がどのように将兵を歓迎するかが細かに記されていた。防府では町会議員の見送りや「西洋手拭」の贈呈、徳山では町の予算から六〇〇円（現実には町から五〇〇円、周辺町村から二〇〇円の七〇〇円）も支出して打ち上げ花火つきの歓迎宴を開くなどと書かれていた。これには、どこで兵士が休憩するかを書くことによって、家族に面会チャンスを知らせるということもあつたと考えられる。<sup>(28)</sup>また、自治体間の「歓迎」競争にはそれなりの意味があつた。これについては後述する。

出征将兵に対しては、地域社会の各所で壮行会が行われた。将校は二四〇円もの予算をかけて芸妓つきの宴会を開いた。防府に在住していた毛利家当主公爵毛利元昭は、八月九日に部隊を慰問した。毛利家からは前日、将校に対し清酒一樽、それ以下のものに対しては酒肴料として二五〇円（一人あたり一〇銭になるという）の現金が寄贈された。<sup>(29)</sup>

八月八日には、大殿小学校で、参加者一八一人を数える山口町主催の壮行会が開かれた。前田蕃穂山口町長と山口に来ていた鈴木莊六第五師団長が相互に挨拶を交わした。前田町長は、シベリアの過酷な気候、そして「殊に又良民と暴徒との区別も明かでない土地柄に於て残忍暴戾極りなき彼の過激派を掃蕩して我が帝国出兵の目的を御貫徹になりまする労苦」に対する同情を述べた。これに対して鈴木師団長は「近時思想界は動揺し精神が安定しない今日の場合に於ては殊に諸君の御後援を頼みたい」と答えてゐる。<sup>(30)</sup>

この、前田山口町長と鈴木師団長のやり取りでも分かるように、シベリア出兵が混迷を深めていたことが広く知られていた。また、シベリア側で、住民の中から日本軍などに抵抗するゲリラ戦を実行する者が出てゐることも知られていた。陸軍側も、この点については隠さなかつた。石川忠治四二連隊長は、新聞紙上で以下のように語つた。日本軍はシベリアにおいて、ポリシエヴィキを「討伐」し、そうでないロシア人は救済して「隣保親善の素地」を作つていかなければならない。しかし、「今日の良民が明日は過激派に化する者もありと其見分けつかざるには困る」。ポリシエヴィキ軍は「鼠賊である恰も台湾の土匪に毛の生えし如きものである」。しかし、「武器もあり軍略も有する奴が有るで油断は決して出来ぬ」。<sup>(31)</sup>普通の住民がゲリラ戦を展開すること、予想されるシベリアでの戦いが困難なものであることを軍人自身が認めていたのである。

軍隊の出発する一九一九年八月一〇日、『防長新聞』は社説を発表した。そこには、シベリアで展開されてゐることがかなり悲観的に書かれていた。シベリアのポリシエヴィキ軍は「出沒常ならず、变幻計り難く、ために我軍が不測事変に逢遇し、不時の災厄に出会すること少なしとせず」。反革命派政権は基礎が不安定であり、チェコ軍は帰

国しつつある。「我友軍たる某国兵の如き、陰に過激派と気脈を通じ、却て我派遣軍の行動に妨害を加へんとする不謹慎の傾向あり」はおそらくアメリカ軍のことであろう。そのような中で、派遣軍への同情が減っているらしいという噂を聞く。「吾人は、決して、其事実にあらざるを想はずんばあらず、而して軍隊と官民との関係最も親密にして、其間の最も融和せる我が県下に於て此事なきを想はずんばあざるなり」。「防長新聞」は、山口県において派遣軍への批判はあるべきではないなどといささか強引な理屈までつけなければならなかったのである。<sup>32</sup>

「事実でないことを信じたい」と言っているのは、それが事実だからであった。憲兵報告は、「平和会議ノ成立セル今日如何ナル必要アリテ出征スルヤ」という声を見逃さなかった。しかし、大半の人は、それを正面切つて言うことはなかったであろう。このような言葉が拾われていることでも分かる。「何ント云フテオ上ノ事ダカラ仕様ハナイ」とはいえ、感情のほとばしりが思わぬ表現を取ることもあった。出征部隊が山口町を行軍中、群衆の中から「用心シテ帰レヨ、シツカリヤレ」と言う声が上がった。兵士の中には「暗涙ヲ催シ之ニ答ヘ兼ネタル者」がいたといふ。<sup>33</sup>

だが、前述の、自治体による将兵への歓迎責め、そして見送りの歓声は、兵士の抱く不安や嘆きを緩和し、兵士に自身の出兵参加への自己肯定をさせる側面もあったと考えられる。兵士にとって行軍はかなり苦痛なものだった。兵士は二日かけて徳山まで徒歩で行軍した(山口から大内経由で防府へ出て一泊し、翌日徳山へ向かう)。特に八月一日の、防府から徳山までの行軍では、暑さと慣れない靴のために「途中四十名ノ落伍者(靴傷其他)」を出し、到着が予定より三時間も遅れた。<sup>34</sup> そのような苦しい行軍の中で、兵士たちは県内各界トップの見送りや沿道の声援に感激したのである。出兵から一一年後に発表さ

れた兵士の回顧には、「沿道到る処同胞の誠心より進る万歳の声」に感激し、自身も万歳を叫びながら歩いたとある。この兵士は「農夫は鉢を捨てて両手を伸べ、道行く人は帽を打ち振って万歳を叫ぶ」様子、そして日の丸の小旗を振る子供たちの姿を見て、「国民に対する強き感謝の心、自分の職務に対する強き責任感」が心の中に織り込まれたからだ、と回想しているのである。<sup>35</sup> 陸軍の出版物に掲載されたことを差し引いても、この回想のような状況がなければ、人は出征することを納得し得なかったであろうことは想像できる。

一九一九年八月二日、四二連隊将兵は徳山港を出港した。徳山町は前日の宴会に引き続き送別会を開き、中川山口県知事は徳山まで出向いて送辞を述べた。<sup>36</sup> 一二〇〇人の見送りの中、徳山港から出征部隊は「小倉丸」「東郷丸」の二隻の船でシベリアへ出動した。兵士の家族は最後まで「面会ヲ求メ或ハ其姿ヲ見ントシテ焦慮シ或ハ購ヒ来リシ物品ヲ渡サントテ群衆ノ中ヲ駆ケ廻リ又ハ将校ニ嘆願」したと記されている。<sup>37</sup>

このように、四二連隊の出発の光景は、ともすれば矛盾するような諸要素が混在するものであった。戦いは困難になるだろうことが認められていた。社会的に「上の言うことだから」とあきらめの空気があったことも否定できない。しかし、ひとたび出動すれば人々は熱狂的に見送り、兵士の中にも納得するものがあるのである。出兵のための応募者は、士気は高くなかったが、理由なく出頭しなかったものはいなかった、と報告にはある。<sup>38</sup> 平和会議の一カ月後に出征ということも理由にはあったかもしれない。

## 小括

第四二連隊のシベリア出兵は、シベリア出兵が当初の大義を喪失す

る中で行われた。山口県においても、第一次世界大戦終結後の平和ムードが流れていた。県都山口町の住民は、第一次世界大戦の終結とその後、の情勢が「世界の改造」であるという公式の見解を聞いていた。そして、「平和来」の歌を歌っていた。だからこそ、出征兵士を見送る中にあっても、「世界大戦終結後になぜシベリアへ行かなければならないのか」という批判の声が聞こえるようになったのである。新聞はシベリア出兵の困難さを認めつつ、強引にシベリア出兵へ国民の支持を集めるべく書いた。『防長新聞』が、出征する兵士への同情を、シベリア出兵への積極的支持へと読み替えようとしていたと考えるのはいささか「読みすぎ」であろうか。

ただ、シベリア出兵への批判が聞こえたとしても、国民を戦場へと送り出すメカニズムは着実に動いた。兵士が出る自治体は熱心に兵士の接待から馬のえさ・水の世話までやっている。愛国婦人会山口県支部はこのあと、兵士に対する「慰問袋」の送付にフル回転することになる。兵士が行軍する沿線の住民は熱心に軍隊を見送った。この声援が、兵士に対して、不安感を減少させ、自身の任務への自覚的・肯定的な方向付けを行ったであろうことはある程度の想像がつく。

だがこのような動きが、兵士を送り出さなければならぬ自治体のみであったと推察させる事実が、報道の中からは見られる。徳山を出港した御用船が関門海峡にさしかかった際、下関市当局は全く通過する兵士に歓迎の意を示さなかったという<sup>(8)</sup>。他の地域でこのような事例があるかどうかは分からないが、自分(の地域)と関係ないことにはたとえ戦争でも冷淡であった可能性はある<sup>(9)</sup>。

この年、シベリア出兵を発動した時の首相、寺内正毅が死去した。そのころに、山口から出征した兵士の中から戦死者が開始める。第五師団の困難な戦いなどについては、また稿を改める必要がある。

## 注

(1) 防衛庁防衛研究所に所蔵されているシベリア出兵関係の文書綴り『西受大日記』『西密受大日記』には、薩哈連州派遣軍の出兵に関する書類も綴じ込まれている。少なくとも陸軍関係者は、サハリンへの出兵はシベリア出兵とつながったものと考えていたことが分かる(ただし、出兵史・憲兵史は別に編纂されている)。

(2) 山口歩兵第四十二連隊史編纂委員会編・刊行『山口歩兵第四十二連隊史』、一九八八年。山口県と近代日本の戦争の關係に関する研究として、新しいものとして田村貞雄「山口県内乱・戦争史のデータベース(明治大正期)」『山口県地方史研究』九一号、二〇〇四年、「山口県内乱・戦争史のデータベース(昭和期)」『山口県地方史研究』九二号、二〇〇四年を得た。

(3) 本節の歴史的背景の概略については、原暉之『シベリア出兵』筑摩書房、一九八九年に負っている。

(4) 『日本外交文書』大正七年第一冊、一〇〇五—一〇〇六頁。

(5) この部分については、さらに深く考察したものととして細谷千博「日本とコルチャク政権承認問題」『ロシア革命と日本』原書房、一九七二年所収を参照のこと。

(6) 参謀本部編『大正七年乃至十一年西伯利出兵史』(以下は『西伯利出兵史』という)第二巻、一九二四年、三四二—三四四頁。筆者が用いたのは新時代社から一九七二年に刊行された復刻版。

(7) この戦いについては、高橋治『派兵』朝日新聞社、一九七三—一九七七年、また拙稿「忠魂碑と『正史』」『九大法学』七六号、一九九八年を参照。

(8) 『西伯利出兵史』第二巻、三二七—三二八頁。

(9) 『西伯利出兵史』第二巻、三一九—三二〇頁。

(10) 『西伯利出兵史』第二巻、三三四—三三七頁。

(11)『防長新聞』は、山口県立山口図書館所蔵。戸島昭「大正昭和期

山口県下の新聞紙発行状況」『山口県文書館研究紀要』一一号、一九八四年によると、『防長新聞』は一九二一年の調査では「中立」、一九二九年の調査では政友会系と記されている。ただし発行人は変わっていない(吉富寅太、本論文で扱う時期は吉敷郡選出の県会議員)。『防長新聞』はこのうち、一九四二年まで山口で発行されるが、一県一紙政策のもとで宇部市の『宇部時報』などと統合され、下関市の『関門日報』となって消滅した。一九四五年、紙名だけが復活している。

(12)日野綏彦「宇部の米騒動」『宇部地方史研究』一二号、一九八四年、拙稿「下関のシベリア出兵と宇部の米騒動、一九一八年八月」『山口県立大学国際文化学部紀要』一〇号、二〇〇四年。

(13)『愛国婦人会山口県支部沿革誌』愛国婦人会山口県支部清算事務所、一九四二年(山口県立山口図書館所蔵)、二四四―二四五頁。愛国婦人会山口県支部の活動については、杉山博昭「愛国婦人会山口県支部の活動」『山口県史研究』三号、一九九五年がある。

(14)『平和の栄光』『防長新聞』一九一九年七月一日。

(15)中川知事の演説を含む以上の部分は、「平和克復大祝賀会」『防長新聞』一九一九年七月二日。

(16)『明日の祝賀大会』『防長新聞』一九一九年六月三〇日。祝賀会のために、前日に掲載しているのである。「平和来」の引用については日本音楽著作権協会への問い合わせを行った。作者没後五〇年を経過しているのであれば、問題はないとのことであった。また、熊毛郡では以下のような歌が歌われていたことが、前述「平和の栄光」の記事にある(作詞作曲者共に不明)。

五年あまり敵味方

入りつ乱れつ戦ひて  
民は苦しみ天は泣き  
戦雲閉ざす全世界

されど独塊力尽き  
邪はそれ正に勝ち難く  
さすがのカイゼル色もなく  
正義の前にひれ伏しぬ

講和談判約成りて  
調印茲に終りけり  
世界平和のそよ風は

これより吹きや始むらん  
いざいざ祝へ声高く  
世界平和の大使命  
帯びたる国のくにたまよ  
万歳万歳万々歳

ちなみに「平和来」の作者作間久吉さくま ひささち 一八六六年―一九四二年。号は鴻東。防長新聞主筆、山口町長を務めた)については、本学部の安光裕子先生の御教示を得た。記して感謝を表す。

(17)『祝福提燈行列』『防長新聞』一九一九年七月九日。

(18)『西伯利亚派遣部隊出発状況ノ件報告』大正八年九月四日 憲兵司令官石光真臣から田中義一陸軍大臣へ出されたもの。『西伯利亚出兵時ニ於ケル憲兵報告』(防衛庁防衛研究所図書館所蔵)より。

以下では簡単に「出発状況報告」という。

ちなみに、下関のシベリア出兵の際の地元紙報道に比べて、『防長新聞』の報道では検閲で削除された痕跡が少ない。神経質な検閲をやめたのか、それとも、第二次世界大戦後の日本が受けた検閲のように、「読者に検閲の痕跡が見えない」ように編集されたものなのか、その他の理由があるのか、一切分からない。

(19) 前掲「出発状況報告」。

(20) 「兵隊さんの読む本は？」『防長新聞』一九一九年六月一七日。

(21) 「出征馬丁募集」『防長新聞』一九一九年七月二〇日。

(22) 「出征間際の山口連隊」『防長新聞』一九一九年七月三〇日。この記事は、「編成命令は来月四日頃下るさうで出来る事ならそれ迄に各自とも面会に来て貰ひたい下令後五日間は殆んど面会は出来まいとの事それら命令が出た面会だと連隊に殺到せらるると軍隊は非常に困るさうだ下令後なれば下令後第六七日位が宜しいさうである」と書いて、家族が面会しやすい日時をそれとなく示しているのが印象的である。動員の様子については前掲「山口歩兵第四十二連隊史」一〇一頁。

(23) 前掲「出発状況報告」。

(24) 「軍隊慰問」『防長新聞』一九一九年七月三〇日。

(25) 「山口軍隊慰問」『防長新聞』一九一九年八月一日。

(26) 「兵士増給十一割」『防長新聞』一九一九年八月四日。「清水大隊長」と書かれている。清水誠大隊長（『西伯利出兵史』に名前が出る）ではないかと推察される。

(27) 「千人針」『防長新聞』一九一九年八月四日。記者に対して、千人針を集めていた老婆は「何分敵の鉄砲は独逸で出来た最新式のものですから腹巻がなけりやお腹位突き徹すさうですからね」と答えた、とある。「ポリシエヴィキはドイツの手先」論が社会的に

ある程度浸透していたことがわかる。

(28) 「出征愈迫る」『防長新聞』一九一九年八月三日。「出征軍隊休憩地 附各地の歓迎振」同紙八月六日、「各地の軍隊歓待」同八月八日。防府の現実の数字は前掲「出発状況報告」。

(29) 前掲「出発状況報告」。このことは勿論新聞にも報道された。毛利家より饞別の酒を汲む将卒」『防長新聞』一九一九年八月八日。「昨日の山口連隊」同紙八月一〇日。

(30) 「出征送別会」『防長新聞』一九一九年八月一〇日。列席者数は前掲「出発状況報告」。

(31) 「連隊長曰く」『防長新聞』一九一九年八月五日。この記事ではさらに、兵士が社会主義に影響される可能性はないので心配しなくてよい、ということまで付け加えられている。陸軍側が思想の伝播に極めて神経質になっていたことが分かる。鈴木師団長の発言は単なる個人的な感想ではなかったのである。

(32) 「派遣軍の出発」『防長新聞』一九一九年八月一〇日社説。

(33) 前掲「出発状況報告」。特に「地方官民父兄等ノ言動」というトピックが立てられている。

(34) 前掲「出発状況報告」。見送る側も相当の苦痛を強いられた。吉敷郡の小学生は「炎熱灼くが如き日に物蔭もなき路上に四五時間も立ち続け」という状態になるため、村医がそばにいた、という（『各地の軍隊歓迎』『防長新聞』一九一九年八月二二日）。

(35) 『戦史叢書第十号 西伯利に於ける第五師団』偕行社、一九三〇年、六頁。筆者は防衛庁防衛研究所所蔵のものを参照したが、最近古書店より同書を購入した。このような、兵士自身が自身の運命や任務などを内面化していくことについては、一ノ瀬俊也「明治・大正・昭和軍隊マニュアル」光文社新書、二〇〇四年が新しい。

(36) 「徳山町主催送別会」『防長新聞』一九一九年八月一三日。

(37) 前掲「出発状況報告」。新聞は見送りの数を「無慮三万余」と報じていた(「盛況を極めたる徳山港解纜の光景」『防長新聞』一九一九年八月一三日)。

(38) 「臨時召集状況ノ件報告」大正八年九月九日 憲兵司令官より田中義一陸相へ。前掲「西伯利出兵時ニ於ケル憲兵報告」に綴じ込まれた文書より。

(39) 前掲「愛国婦人会山口県支部沿革誌」二四五―二四六頁。

(40) 「下関当局冷淡」『防長新聞』一九一九年八月一五日。

(41) 前掲「愛国婦人会山口県支部沿革誌」にはこの推察を裏付ける事実がある。一九一八年と一九一九年、同会はシベリア出兵関係者への慰問袋を集め、発送した。このとき、出征兵士を出していない地域から贈られた慰問袋の数は著しく少ないのである。

※本論文は、平成一六年度山口県立大学研究創作活動助成事業に基づく研究成果の一部として発表されるものである。

(日本の政治・比較政治論担当)